

佳作

# 花束を投げる

「ホロコーストとパレスチナ問題の類似性みる虚構」

野村仁愛のむらにいな

(東京都／私立学習院女子高等科二年)

## 一、はじめに

「パレスチナ自治区のガザ地区で避難者が身を寄せていた学校がイスラエル軍に空爆され、地元当局は百人以上が死亡したと発表しました」(注1)。神妙な様子で原稿を読み上げたアナウンサーは、次の瞬間には表情を一変させ、バリ五輪での日本人選手の華々しい活躍を報じた。

四年に一度の平和の祭典。国連では今回も五輪期間と前後一週間の休戦を呼びかける五輪休戦決議が採択されたが、ロシアによるウクライナ侵攻や、イスラエルとイスラム組織ハマスの武力衝突などの戦争、紛争は止まぬまま、オリンピックは開催されることとなった。

私は今僥倖にも、戦禍に巻き込まれることなく平穏な人生を送っている。けれどもこれは決して当たり前のことではない、という事実を私は時々忘れてしまいたいそうになる。私は考える。平和とは一体何なのだろうか。

小学生の頃、リオデジャネイロ五輪難民選手団の競泳選手であり、国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)の親善大使であるアフガニスタン出身のユスラ・マルディニさんが来校してくれたことがある。世界中の人々に難民問題を理解してもらおうと自身の壮絶な体験を語る彼女の言葉に、自分が今まで過ごしてきた環境がいかに恵まれていたのか、子供ながらに強い衝撃を受けた。しかし、あれから二度目のオリンピ

ックを迎えてもなお、彼女達が直面する現実には広くは知られていない。

冒頭の学校では空爆当時、避難者がイスラム教の夜明けの礼拝を行っていたと地元当局は発表した。それに対しイスラエル軍は「ハマスのテロリストや指揮官の隠れ家となつている指揮統制所を攻撃した」との声明を挙げた(注2)。双方の主張は食い違っており、どちらかの主張が真実なのか、或いはフィクションなのか定かではない。彼らが殺される必要は本当にあったのだろうか。

一つ言えるのは、国家はフィクションを用いて民衆を都合のいいように誘導してきたということだ。国家のプロパガンダに惑わされ、人々がいないものがあるように、あるものをないように信じ込むことで虚構はいつしか現実となりそれが歴史を作っているのではないか。

本稿では、未だ解決の気配を見せないパレスチナ問題を軸とし、ナチス・ドイツのエダヤ人迫害にも触れながら、歴史におけるフィクションを主に虚構の語義から見つめ論じていきたいと思う。

## 二、ガザで何が起きているか

二〇二三年十月七日。パレスチナ暫定自治区のガザ地区を実効支配するイスラム組織・ハマスがイスラエルに対しての大規模な奇襲攻撃を行い、およそ一二〇〇人のイスラエル人が犠牲となり、二四〇人以上がガザ地区に拉致され人質にされた(注3)。イスラエルのネタニヤフ政権は報復としてハマスの壊滅、人質全員の解放、そしてガザ地区を再びイスラエルの脅威に戻さないことを目的に掲げ、過去最大規模の軍事攻撃を続けている。八月現在パレスチナ人の犠牲者は四万人を超えており、そのうち女性と子供がおよそ七割を占めている(注4)。攻撃は罪のない人々に向けられ、生活を破壊された人々は、避難所を転々とする日々を送っている。イスラエル軍はガザ地区を完全封鎖し物資の搬入を制限しているため、水や食料、医薬品、電力、燃料等生活に必要な物全てが欠乏している。そのため二歳以下の九〇%の子供が栄養失調に陥るほど、人々は常に飢えに苦しみ、深刻な水不足に見舞われている。また衛生環境も非常に悪く、感染症が蔓延している。病院は機能を失い治療もままならない。

そしてイスラエル軍は、その退避先にも爆弾を打ち込む。安全とされたはずの人道エリアは瓦礫と死体に塗れ足の踏み場もなく、しかしそれすら日に日に狭められていく(注5)。昨日まで生きていたはずの家族の、友人の死体がグラム単位で袋詰めされるような、そんな想像を絶する出来事が、ガザでは日常的に起こっているのだ。

ハマスによるテロは無論、許されることではない。それに対し、自衛権を行使したイスラエルの反撃は国際法上適法であるとはいえ、民間人への容赦ない無差別攻撃はもはや国際人道法の範疇を逸脱しているのではないか。同様の指摘は国際社会でも広がっている。ネタニヤフ首相は、それに対し一貫して住民の犠牲は意図したものであるのではないとの姿勢を貫き、反発している。「自分達は常に絶滅の脅威に晒されてきた民族である。しかし国際社会は助けけてくれない。自分の身は自分で守る必要があり、そのためなら如何なる手段を取っても構わない」という独特の考え方が根底にあるのだ(注6)。これはユダヤ人とイスラエルが辿ってきた歴史に基づいている。

## 三、ユダヤ人の歴史

ユダヤ人は二世紀にローマ軍に敗れパレスチナの地を追われて以降、その長い歴史の中で最も虚構に翻弄されてきた人々だと言えよう。時には民族的な、時には宗教的な理由から生まれた偏見により様々な差別を受け、その時代に起こった悪い事象のスケープゴートにされることが非常に多かった(注7)。例えば中世ではキリストの処刑の責任を負わされ、信仰の違いにより嫌悪されてきた。また、ユダヤ人は欧州で土地を所有することや職人の組合に加入することは禁じられていたためキリスト教徒の忌み嫌う金貸しの職につくことが一般的で、多くの偏見に晒され不況の時などは激しい迫害を受けた。一八世紀以降、憲法により法の下の平等が各国で制定されたため、ユダヤ人は政治や軍事に携わることができるようになった。しかし伝統的な職業がユダヤ人に奪われているという思い込みが生まれ、更に反ユダヤ主義が広がっていった。このようにユダヤ人の存在自体、虚構が真実に成り変わり歴史を構成していった象徴と言えるのだ。

そしてその被害者としての記憶が最も色

濃いのは、第二次世界大戦下におけるナチス・ドイツによる民族絶滅政策・大量虐殺、即ち「ホロコースト」だろう。

ナチスもまた欧州に根差す反ユダヤ主義を利用した。一つは、当時経済破綻に陥っていたドイツで、問題の原因を全てユダヤ人に押し付けて、責任を負わせる目的。もう一つは、第一次世界大戦敗戦の結果、すべての海外植民地を喪失させられたドイツが列強国と同等の地位を取り戻すため、植民地を獲得する大義名分として自らを「優等なアーリア民族」と定義し、民族階層の最底辺にユダヤ人を位置付けることによって国民のナシヨナリズム意識を高めようとする目的だった(注8)。

国民のナシヨナリズム意識が高まることは集団に団結力が生まれ統治しやすくなるだけでなく、内部で起こっている問題から目を逸させやすくなることも意味する。そして自らの属する集団以外、即ち外集団が脅威であると認知される時、最も集団内の団結力が高まるのだ。外集団に対するイメージは極化しやすく、それは一般的にネガティブであることが多い。そのため権力者は外集団が自らの敵であること、また外集団のネガティブなイメージを喧伝するこ

とによって民衆を支配することがあった。特に民族意識の強いユダヤ人は度々権力者が人々を意のままに動かすための恰好の道具として用いられ、共通の敵としてスケープゴートイニングされてきたのである。

#### 四、ホロコーストはなぜ起きたか

ホロコーストの特異な点は、ナチスの残虐な行為に政府への協力者だけでなく、大半の国民が加担していたという事実だと考える。確かに欧州に根付く反ユダヤ思想は深刻なものだったが、だからといって国民が特定の民族を丸ごと殲滅しようとする行為に協力していたなどは俄かには信じ難い。では最初から国民がナチスの反ユダヤ政策に協力的だったかという点、それは否である。当時、大半のドイツ人は反ユダヤ的プロパガンダに対し受動的な態度であり、稀ではあるがそれらを批判する者もいた。しかし彼らも自らが攻撃の対象となることを恐れ、結局は言論統制された。よってドイツ国民のほとんどがナチス支配下における反ユダヤ主義を黙認する形となった(注9)。

やがて元来反ユダヤ感情の高い地域でのユダヤ人差別、迫害が激化し、ニュルンベ

ルク法に代表される差別法は、それらの迫害を適法化した。ナチスの東欧地域への侵攻、そして併合は、ユダヤ人政策以上に国民のナシヨナリズム意識を高めた。そして映画やラジオなどの娯楽、新聞等を用い、「ユダヤ人は我々を滅ぼそうとしている」「劣等人種である」「伝染病保菌者である」などの虚構を繰り返し刷り込んだ。このようにゆつくりと時間をかけ、ナチスは国民にユダヤ人嫌悪の感情を植え付けていったのだ(注10)。

そして、「水晶の夜」。契機となったのは、一九三八年十一月七日、ナチスによるポーランド系ユダヤ人追放を苦にしたあるユダヤ人青年がパリのドイツ大使館員を狙撃した事件である。ナチスはこの事件を「ユダヤ民族の責任」であるとし、世界中のユダヤ人がナチスの暗殺を試みていると大々的に吹聴した。この襲撃を既膨れ上がっていた反ユダヤ感情を爆発させるための機会だと捉えたのだ。そして、九日晚から翌十日早朝にかけ、ドイツ各地で歴史的なポグロム(ユダヤ人に対する暴力的な破壊行為)が勃発する。この事件を皮切りに、黙認していた国民たちが一気に反ユダヤに傾き、その先は過激化の一途を辿るばかりであった

(注11)。

このように、ナチスの漸進的な反ユダヤ政策はドイツ人の良識を麻痺させ政策に加担させるのに非常に効果的であったと推測できる。ナチスの作り出した虚構が国民の本来存在しなかつた憎悪の感情を生んだと言う点で、虚構がないものがあるように捻じ曲げてしまった例に挙げていいだろう。

## 五、イスラエルで

結果的に当時のユダヤ人の三分の一にもあたる六百万人もの犠牲者を出したホロコーストは、多くのユダヤ人に傷痕を残した。にも関わらず今、イスラエル軍によるパレスチナへの攻撃はジェノサイドではないかという議論が国際司法裁判所でなされている(注12)。ジェノサイドはナチスの迫害を踏まえ作られた言葉であり、「国民的、人種的、民族的、宗教的集団の、全部または一部を破壊する意図を持った、殺害、肉体的・精神的な危害、過酷な生活条件の強化、出生を妨げる措置」と国連のジェノサイド条約で定義されている。かつて被害者であったはずのユダヤ人達が今や加害者側に立っているのである。

ネタニヤフ首相は「ハマスの残虐行為は

ホロコースト以来最も恐ろしいもの」と喧伝することで、ホロコーストに二度と屈しないという国民感情に訴えかけた(注13)。その結果、現在イスラエルの国民は「ハマスを一掃するべきだ」とまとまっており、そのためなら如何なる手段も辞さないという空気が広がっている。ここでもまた国家による虚構が事実と化し歴史となつていこうとしている。

意外なことにイスラエル政府はホロコーストの経験を平和を目指すためではなく、度重なる戦争のために国民を統合させ士気を高めるべく利用してきた。ホロコーストの生還者は差別の対象とされ沈黙を強いられてきたという。そうした教育政策は若年層にも本来不必要な憎しみを受け継がせてしまつている。更に、女性を含め課された兵役によつて全国民は自衛意識を徹底的に叩き込まれていく。

現在政府の政策を批判する者は反逆罪で捕えられているという(注14)。これはハマスの攻撃以前は見られなかったことで、かつてイスラエルにあったはずの言論の自由は、今侵されつつあるのだ。私は国家或いは政権の狙い通りに虚構が人々に必要のない憎しみの感情を芽生えさせてしまつた

点で、ホロコーストとイスラエルでの出来事に類似性を感じる。

ナチスの当時の状況を鑑みると確かに反対の声を上げることは非常に難しかっただろう。しかし、大衆が間違っていることをそうと認識し協力の姿勢を見せなければ、政府は狙い通りの効果が得られなかったとし政策を転換するなどしてあそこまでの事態に発展しなかつたかもしれない。人々が虚構を見極められなかつたことが悲劇を招いたのだと言える。

また、パレスチナ問題についても同じことが言える。一九世紀のユダヤ人のパレスチナ入植当初には二つの民族は共存していたと言うが、今や壁を隔てた向こう側にいるのが同じ血の通つた人間だということも忘れてしまつている様子を恐怖を覚える。間違っていることを間違っていると云えない空気が集団心理を働かせ、人の良心を麻痺させてしまつているのではないだろうか。

## 六、パレスチナで

生きながらにして死んでいる。ガザの状況をそう表現する人がいる。イスラエルの兵士は、ガザの青年を狙撃する際、彼らの

足を狙うそうだ。もしこの戦禍を生き延びたとしても、彼らは二度と健常者としての人生を歩めない。憎しみの連鎖がこの先何世代にも渡り受け継がれていこうとしている。

ガザの地獄は今に始まった事ではない。二〇〇二年以降、ガザはイスラエルが建設した分離壁に囲まれ「天井のない監獄」と呼ばれてきた。基幹産業は既に崩壊しており、失業率は七〇パーセントに迫る(注15)。現在ガザでは生きる希望をなくした若者達の自殺が急増している。同じ現象は水晶の夜直後のユダヤ人やナチスの収容所内でも確認されている。イスラム教において自殺は禁忌とされており、その言葉自体浸透してきたのは最近のことなのだ。

イスラエル建国以来長きにわたりパレスチナ問題を未解決のまま国際社会は放置してきた。今まではアラブ諸国がパレスチナの後ろ盾となってきたが、和平交渉が置き去りのままイスラエルとの関係を見直し始め、サウジアラビアが国交正常化に向けての動きを見せたことから、国際社会からの孤立を恐れ、十月七日の攻撃に踏み切ったと言われている。「土地を失い平和もなく、ガザの現状にもう耐えられなくなったので

す。作戦に伴う最悪のシナリオや損害なども全て分かった上で実行したのです」。ハマスのレバノン事務所アブドルハディ報道官は語る(注16)。

ガザの状況は一向に良くならないのに、世界は自分達のことを忘れていく。追い詰められた青年達が、戦闘員としてハマスに与していったという。彼らがやったことの結果ばかりを非難して、行為の理由に目を向けず解決しようとしなければ、彼らは爆弾を投げるしかないのだ。

イスラエルでも度重なる迫害を見て見ぬ振りしてきた国際社会に対する不信感が強く現在の暴走を招いている。その意味で両国は国際社会の黙認の被害者と言えるのではないだろうか。ハマスの人質になったイスラエル人の存在も、ガザで攻撃を受けているパレスチナ人の存在も事実である以上、憎しみは募りもはや当事者間だけの解決は絶望的だ。長い歴史を通して、あるものをないかのように扱ってきた欧米を中心とする国際社会が、本来ならばパレスチナ問題の解決を図らなければならぬのに、その責任を放棄しているように感じる。私が今感じている幸せや平和もパレスチナがないという虚構の世界の上に成り立つて

いたのかもしれない。

## 七、私として

「わたしはわたしとして生きることを許してほしい」。これはユダヤ人の少女アンネ・フランクがナチスの迫害から逃れるための隠れ家生活で記した「アンネの日記」の一節である(注17)。ユダヤ人は迫害の最中極限状態にある中でも人間としてあり続けることで尊厳を保ってきたという。前述のユスラさんはお話の中で、私達もまた一人一人夢を持った普通の人間であると強調していた。自らの属性によって強制的に争いの場に引き摺り出されてしまった無辜の人々は、一様に自らが人間であることが忘れられているような現実を嘆いているのだ。

イスラエル人が度々パレスチナ人は「オホムラ」ハマスであると誤認してしまったり、当時のドイツ人がユダヤ人は皆敵だと認識したりしたように、民族、宗教、性別、国籍などの属性で人を判断するとその属性自体のイメージが一般化され個に当てはめられてしまい、個人の個性、唯一性が認識されなくなってしまう。そしてそれは相手を非人間化することに繋がる。非人間化は相手を

人間だと見なさなくなる、また人間より劣っている別の存在とみなすことである。これにより相手に対する共感や配慮が欠如し攻撃的になるだけでなく、相手の尊厳を否定することにもなるのだ。

そしてまた恐ろしいことに外集団を攻撃する時、自らも集団の一部としての役割を全うする過程で没個性化し自らの主義信条と相反してしまうことがある。内集団に対する攻撃は許せないのに外集団に同じことをするのは許容できてしまうのはなぜか。

これは仮定の話だが、もし集団を分ける定義の概念が消失した時、加害者は自分の行いを今まで通り許容できるのか。そう考えてみると民族という枠組すら虚構であるのかもしれない。

そして私は無関心や無知も人間の尊厳の否定に繋がると言いたい。集団同士の競争を第三者の視点から傍観する時、自分とは無関係だと切り離す際に被害者の状況を矮小化するバイアスがかかることがある。被害者の置かれている現実を見て見ぬ振りし続けることは間接的に加害に加担することだと考える。

## 八、終わりに

野球帽を逆さに被り、顔を隠した暴徒。彼が今にも投げようとしているのは、火炎瓶でも爆弾でもなく、花束だった。「Love is in the Air」。正体不明のストリートアーティスト・バンクシーがパレスチナのベツヘレムに描いた壁画作品だ(注18)。彼はその他にも数多くの作品を分離壁に残し、それは世界がパレスチナに目を向ける大きなきっかけとなった。彼のようにアートで社会を変えようとする人をアーティストと呼ぶ。

ここで、フィクションのもう一つの語義「創作」の方に目を向けてみたいと思う。虚構によって生まれてしまった負のイメージを払拭することは確かに容易ではない。しかし創作は時にそれを遥かに凌駕した大きな力を持つことがある。その力で悪いイメージやバイアスを是正しありのままを受け入れることが叶えば、人々が憎み合う現状を変えられるのではないだろうか。もし今、渦中にいる人々が現状を切り拓くため暴力に訴えるしかないのだとしたら、私達がそれ以外の手段で協力するのは責務だと考える。

実際に、今世界で若者がこの問題に関心を寄せ、声を上げ始めている。イスラエル

に軍事支援するアメリカの名門大学でイスラエルへの抗議活動が相次ぎ、バイデン政権は世論の変化を無視できなくなってきた。特に人道問題に敏感で多様性を重んじ相手を尊重する姿勢の若者が増えていることには大きな希望を感じる。

昨今は生成AIやフェイクニュースが増えつつある中で、正しい情報を選び取ることがより一層難しくなったと感ずる。真偽不明の大量の情報が意図せずとも流れてくる現代でその一つ一つを精査するには多大な労力がかかるだろう。しかし、新聞やラジオしかなく情報の伝達手段が限られていた第二次世界大戦当時に比べ、もし誰かが意図的に人々を扇動しようとしても正しい情報を手にはしやすくなったはずである。

私たちにできることは、今世界で起こっていることに関心を寄せ続けることだと思う。間違っていることをそのまま黙認しない。何が正しいか、正しくないかを注視し見極める。これは非常に難しいことだが、そんな姿勢の人が一人でも増えれば、平和な世界への糸口が少しでも掴めるような気がするのだ。

いつか花束を投げ合える、そんな未来の

ために。

二四年

〈参考文献〉

- (注1) NHKウェブニュース「ガザ地元当局『学校をイスラエル軍が空爆 一〇〇人以上死亡』」  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240810/k10014545341000.html>
- (注2) ロイター通信「イスラエルがガザの学校攻撃、一〇〇人以上死亡 パレスチナ側報道」  
<https://jp.reuters.com/world/security/O6MR7NAU5I2VJPSB2A2DSTXQ42024-08-10/>
- (注3) NHKウェブニュース「イスラエル・ハマスの戦闘から半年 事態打開の道筋は見えず」  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240407/k10014415031000.html>
- (注4) CNNニュース「ガザの犠牲者三万四千人超す、七・二%は女性と子ども パレスチナ保健省」  
<https://www.cnn.co.jp/world/35218062.html>
- (注5) 岡真理『ガザとは何か パレスチナを知るための緊急講義』大和書房、二〇

(注6、13) NHKクローズアップ現代全記録「ガザと、ホロコースト生還者(サバ

イバー) 〃 殺りくはなぜ止まないのか」

<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4867/>

(注7、9) 永峯三千輝『アウシユウィッツへの道 ホロコーストはなぜ、いつからどっどどのように』春風社、二〇二二年

(注8) メイヤ・レヴィン(著) 岳真也(武者圭子(訳))『イスラエル建国物語』ミルトス、一九九四年

(注10) ホロコースト百科事典 ナチスのパルガンダと検閲

<https://encyclopedia.ushmm.org/content/ja/article/nazi-propaganda-and-censorship>

(注11) ホロコースト百科事典 クリスタル・ナハト

<https://encyclopedia.ushmm.org/content/ja/article/kristalnacht>

(注2) BBCニュース「イスラエルに『エノサイド』防止の暫定命令、戦闘停止は命じず＝国際司法裁判所」

<https://www.bbc.com/japanese/68115922>

(注14) 東京新聞ウェブ「SNSで反戦を訴えたら逮捕された…高校教師を襲った出来事とイスラエル国内に漂う『空気』の異様さ」

<https://www.tokyo-np.co.jp/article/322859>

(注15) パレスチナ子供のキャンペーンガザ地区を知ろう

<https://ccp-ngo.jp/palestine/gaza-information/>

(注16) NHKクローズアップ現代全記録「大規模攻撃の〃深層〃ハマスとイスラエル・激突の行方」

<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4832/>

(注17) アンネ・フランク(著) 深町真理子(訳)『アンネの日記』文藝春秋、二〇〇三年

(注18) 映像の世紀 バタフライエフェクト「砂漠の英雄と100年の悲劇」NHK

二〇一三年十二月二十七日

※参考URLは二〇二四年八月二十五日時点のものである。